

データ活かしケア

社会福祉法人信愛報恩会（東京都清瀬市）は2019年、ICT活用に向けたプロジェクトチームを発足し、業務改革に取り組んでいる。同市の「しんあい清戸の里グループホームひまわり」（2ユニット・定員18名）の田口弘子ホーム長に話を聞いた。

システム連携で記録精度向上

社会福祉法人信愛報恩会



しんあい清戸の里グループホームひまわり 田口弘子ホーム長

——導入しているシステムは。

田口 エコナビスタの「見守りシステム三ライズシステムナビ+DR（以下・ライズシステムナビ）」と「WISEMAN」の「WISEMANグループホーム管理システム」を監視システムと捉え

てしまうケースもあるが、目的は利用者を見守ることだ。転倒リスクが高い人などに、アラートを設定すると利用者の行動を阻害してしまうことがある。アラート活用のみではなく、その時のモニター情報で、見守れる体制

を構築している。また、時間で動くという介護ではなく、利用者の睡眠状況・行動に合わせたケアを提供する必要があり、導入後、監視を廃止してモニターを見ながら対応すること、過不足のない介入ができるようになった。

職員は1時、3時、5時にモニター



しんあい清戸の里グループホーム外観



システムをカスタマイズして活用

た。職員の動きも無理や無駄が減り、体力的な負担は減少したが、職員の夜間帯の不安や心配が減り、安心やゆとりが生まれたことが最大の成果だ。

——システム連携による業務の変化は。

田口 連携前はライズシステムで表示される利用者の体動、睡眠状況などを職員が目視で記録していた。連携後は、22時、24時、2時、4時、6時に自動記録されるため、決まった時間の記録が残せるようになった。職員は1時、3時、5時にモニター

良質な眠りにフォーカス

——データをどのように活用しているのか。田口 当法人では利用者の良質な眠りにフォーカスしてICTを導入している。センサーが測定した数値を基に睡眠状況を把握している。睡眠は様々な要素が影響するので、異常が続く場合は原因調査が必要だ。通常時のデータを把握し変化のある場合や睡眠に何らかの支障があったときなどに睡眠状況を振り返ることで、体調変化や活動状況を知ることができ、次の予測や良質な睡眠への足掛かりとなる。利用者の日中の活動を考慮し、時に散歩に行くといいことが有効なこともある。

——法人で月一回、ICTのプロジェクト会議を開催している。田口 各施設の責任者でプロジェクト会議を開催している。会議では、失敗のケースを挙げて理由を見直す機会を設けている。ICTを活用するためには、数値や過去のグラフなどからデータを読み解く力が重要だ。そのためほかの事業所の事例を共有する必要がある。ICT活用には職員の見守り、気づき、介入の連携が重要だ。田口 ICTを使いこなすのではなく、一緒に仕事をやるパートナーの一人だと考えている。センサーの不具合なども容認できるようにする。また、導入する何でも解決できると考えるのではなく、自分たちがやりたいことを実現するために活用するのかが模索する必要がある。当施設では、システムをカスタマイズして利用者の心拍数が表示できるようにしている。利用者個々の困りごとに対応できる環境構築をした。